

Ⅱ 特別連載 Ⅱ

科学技術 振興機構 『さくらサイエンスプログラム』友情と感激

山形大学の活動報告



菅原 靖
(山形大学 学術研究院准教授)

ベトナムの大学生が

「誰一人 取り残さない」精神文化と科学学ぶ

科学は、地球温暖化、感染症など現在または将来の課題に応えるのみならず、過去から引き継がれた精神文化やその象徴を守り、再評価する役割を担うことがあります。後者の好例が、山形大学がキャンパスを構える地域にもあります。江戸幕藩体制期から第二次大戦期の日本では、有力な地主や経営者が自らの事業に併せて「公益」を重視し、様々な活動に取り組み事例が見られました。

それら、現代のSDGsの理念を先取りしたような活動において、山形県庄内地域は、その質、量および継続性の面で他に抜きん出ていると小松隆二(公益学、初代・東北公益文科大学長)は指摘します。その庄内地域では、公益活動の象徴とも言えるクロマツ海岸防災林の保全に最新科学は貢献し、また、地域行政が「公益」を切り口に地域ブランディングを図る事象」が観光消費論の観点から注目されています。

この地域特性を生かし、本事業では、本学ベトナム拠点校で学ぶ学生5名に、①人類社会の課題に学問が応えうる場面②日本の精神文化とその現代的意義——について、実践的に学ぶ機会を提供しようと試みました。

①の例として、先人の私財も投じられ、200年以上の長きに渡って地域農業を強風(塩害)から守ってきたクロマツ海岸防災林の機能と保全について、本学の林田副学長(森林生態保全学)の解説を受けながら、実際に森林に入って学ぶ場面が設けられました。実習当日、折しも強風に見舞われたこともより深い理解をもたらしました。森林の中では、海岸に近い木は強風の影響で陸側(東側)に傾いて樹高が低く、海岸から離れるほど、木は直立に近くなり樹高も高くなることを実習

プログラムスケジュール

1日目	入国・到着
2日目	山形大学キャンパスツアー 本学学生との交流
3日目	鶴岡市の 公益活動を学ぶ講義と現地実習
4日目	庄内地域の 地域ブランディングを学ぶ講義と現地実習
5日目	クロマツ海岸林の現地実習 母校出身教員及び留学生との対話
6日目	観光消費と精神文化に係る講義と現地実習
7日目	出国・出発

しました。海岸で感じた強風と、防災林に深く立ち入った際の微風環境のコントラストは、クロマツ海岸防災林の機能に対する体感を通じた理解をもたらしたようです。地域の先人が、次世代の幸福を願いながら、現代でも困難な植林に挑み、その機能が現在に至るまで地域住民に期待され、その保全を最新科学が支えていることの理解は、SDGs時代の科学イノベーションを担う人材に欠かせない視点をもたらしたのではないかと考えています。

日本の精神文化については、学校給食発祥の地(鶴岡市)、致道博物館(鶴岡市)、本間家旧宅(酒田市)、鶴岡裁縫学校跡地(鶴岡市)、大山公園(鶴岡市)などを訪れ、それぞれが象徴する公益の精神を学びました。致道博物館では、ボランティアガイドから英語による詳しい地域史・文化の解説を受けました。ある段階で、招へい学生の方から「Sakai Family」(=庄内藩歴代藩主の酒井家のこと)、「Homma Family」(=日本を代表する豪商である本間家のこと)などの用語が始めました。精神文化を理解することは「人」を理解することであることを改めて認識しました。その点、3泊のホームステイ体験も、地域住民の精神性に触れる上で貴重なものであったと考えられます。

総じて、これら精神文化の理解が、先進工業国という側面が主となりがちな日本理解に厚みをもたらす、招へい学生が母国と日本との友好発展をリードしてくれることを期待したいと思います。また、招へい学生は、訪問地ごとの説明を聞きながら、観光などにおいて「精神文化などソフトパワーのある地域は付加価値を生み、それが無い地域は逆にデイスカウトされること」を学びました。



母校出身の山形大学教員(右端)より日本の研究環境について学ぶ



強風の庄内海岸でクロマツ海岸防災林の歴史、機能、保全について学ぶ



母校出身の山形大学教員の研究フィールドを訪れる



日本の学校給食発祥の地(忠愛小学校跡地)を訪れる

招へい学生は、初めての来日にもかかわらず、地域史のキーワードを自然に口にするほど習熟してくれました。その理解も、様々な山形の関係者との対話によってもたらされたものです。コロナ禍による制約が解かれた今、青年期こそ貴重でありながら、その多くが失われてきた「対面による対話」の場面を、これからも諸事業に意識して織り込んでいきたいと考えています。

この度の招へいによって、前段の「再構築」をも大きく前進させる展開が見られます。招へい学生が帰国して2カ月後となる今年9月に実施した先述プログラムにおいて、招へいした5名の学生は、本学派遣学生との交流をリードし、両国学生の対話が十分深まる場面づくりを主導してくれました。ちなみに、その場面の意義に係るエピソードは、BEVIという心理テストで測った日本人学生の成長によって明確に示されています。

● 招へいを終えて

山形大学では、コロナ禍前まで、招へい学生が学ぶベトナム国立農業大学において2週間程度の短期プログラムを実施し、年間延べ約25名の日本人学生を派遣していました。そのプログラムは、教職員が引率せずに学生だけで外国に渡り、滞在中の安全確保は「現地学生と共に行動する」ことで図るという特徴あるものでした。その方が、学生どうしの対話が進展し、お互いの共感を踏まえた異文化理解が深まるからです。

公益活動ゆかりの地を訪問した後は、本学農学部(招へい学生も農学部所属)で学ぶ日本人学生および留学生との交流、研究室訪問に臨みました。その日は、最後に、ベトナム国立農業大学出身の本学教員であるルック先生の研究について説明を受けました。招へい学生は、本学の研究環境に対するベトナム人の視点からの評価を聞いて、何を感じたのでしょうか。「公益」で特徴づけられる地域の精神風土と合わせ、優秀な招へい学生が、研究等のフィールドとして山形(日本)を、誇りをもって選択してくれることを願っています。

一方、その効果を高めるためには、互いの関心の高さ、換言すれば、「本学学生の来訪を心待ちにしている現地学生の存在」が不可欠です。ところが、コロナ禍により対面による交流場面が失われ、従来の特徴的な交流を知る学生が全て卒業してしまっただけです。その結果、そのプログラムを十全な形で再開するための事業環境の再構築が求められました。